

審査の結果の要旨

三尾裕子

三尾裕子氏の論文「王爺信仰の歴史民族誌—台湾漢人の民間信仰の動態—」は、台湾中西部の沿海地域にある「五年王爺」という神をまつる馬鳴山鎮安宮と名付けられた“廟”、すなわち様々な霊的存在を祀る施設、を社会的な場として展開される信仰観念や信仰実践を、歴史人類学的に考察したモノグラフである。論者は1990年より1991年にかけて14ヶ月にわたる本格的な調査を行い、その後も、1998年には重要な祭礼を調査記録し、1996年から98年にかけては中国福建省において断続的に王爺信仰の広域調査を行った。

本論文で論者は、中国宗教研究において常に問題とされてきた、「神・鬼・祖先」という三つの超自然的存在についての再考を行った。また、近年非常な高まりを見せている台湾各地の廟を中心とする信仰の一つの事例として、五年王爺という神に関する社会・宗教的現象を分析しようとした。特に後者については、人々の五年王爺への、共同体としての関わり、信仰集団としての関わり、またそれへの信仰を核とする個人的な関わりなど、様々な信仰の様態を包括的に説明しようとした。

本論文の構成は、全体としては通常文化人類学のモノグラフを踏襲し、まず、序章において本論文の問題の所在を明らかにしたあと、第一章でこの廟のある地域の地理的、そして歴史的概括を行う。その記述に過不足はない。第二章と第三章では五年王爺信仰の中心と位置づけられる馬鳴山鎮安宮における祭礼を記述する。その祭礼集団と組織は、論者が理解の簡便のために示す図と表さえがさらなる説明を要するほどの複雑さを持ち、時にこうした研究のらち外にある者にはその細部を理解するのに困難を覚えるのであるが、それは論者の長期間の執拗なまでの調査の成果の精密さを表しているともいえよう。逆に儀礼のプロセスの描写は、実地調査の成果をふまえて、その祭礼の規模とそれに費やす人々のエネルギーとをよく活写している。ついで、第四章では、王爺信仰の始まりとその発展を説明し、第五章で、その王爺信仰の歴史的経緯の中から、この信仰の本質性を明らかにしようとする。そこで示された、五年王爺という超自然的な存在が、不慮の死を遂げた「鬼」としての、あるいは疫病を治す「神」としての複相的な由来を持つ事実は、この論文全体において、現代の台湾における王爺信仰が複雑な社会の様々な要求や願望を吸い込むことが出来る信仰対

象として隆盛を誇っていることを示唆する重要な論点となる。

本論文の後半、第六章以下では、前半部で提出したデータを元に、これまでの研究への批判と新たな分析とが行われる。第六章は「靈魂の動態性」と名付けられ、神・鬼・祖先という「三位モデル」の再考がなされる。従来中国研究では、超自然界の三種の靈魂は、現世の人間の三分類に対応しているとされてきた。すなわち神が現世における皇帝と帝国を代表する役人であり、祖先は生活世界における家族とリネージ、そして鬼はそうした社会から外れたよそ者、にそれぞれ当てはまるのだ。しかし、論者は、そうした、鮮やかな、しかしながら固定的な図式に疑問を呈する。まず、論者が調査した人々の「鬼」についての現在の知識は、前述の図式が抽出された、いわゆる中国古典に見られる記述と異なるのだ。すなわち古典によれば、人は死ねば必ず鬼となるが、しかるべき人、子孫などによって埋葬され祭祀されることで鬼となることをまぬがれ、祖先となる。ところが、人々の間には、元々祖先を広義の意味で鬼ととらえる認識は薄く、鬼とは常にトラブルを起こしかねない存在と考えられている。また、「神」として人々が尊崇する存在は、必ずしも前述のモデルの「神」のように固定不変のものではなく、社会変化に応じて栄枯盛衰し、また他の研究者も同様の指摘をしているように、場合によっては鬼が神に変容することもあるのだ。論者は、さらに、そもそも女性である女神が高い位置を占めるのは現世の男性優位のジェンダー・ヒエラルキーとは明らかに不一致である、と論じる。こうした点から論者は、超自然的世界と現世との構造的な対応関係は、ある時はたしかに現世の大枠として定まった秩序を説明するものとして用いられながらも、ある時は、揺れ動き変化する現実世界の権力の関係を表し、またそう表現することで現実を操作することが可能となる、動態的な性格を持つと主張する。

第七章と八章では、もう一つの論点、宗教現象の組織構造的な解明を行う。論者はこれまでの研究者が提出してきた祭祀圏という概念や、信徒圏、信者圏、祭祀域という三つのレベルによるモデルを馬鳴山鎮安宮を焦点とする王爺に関する宗教活動のデータに当てはめた。その作業をすることによって、それらのモデルでは当てはまらない宗教現象が浮き彫りにされた。それは新たな信者たちに見られる、彼らが鎮安宮を取り囲む共同体の一員としてではなく、また、五年王爺を信仰する集団の一人としてというよりも、むしろ個人として、それぞれ個別に抱える悩みや問題から、王爺への信仰を持つに至るという過程であ

った。しかし、論者はそれを産業化の中で生まれた近代的な主体が、自覚的に神を選び取っているものとしてはとらえない。むしろ、人々が信仰可能な様々な対象へアプローチする中で、神の側からの働きかけに応えるかたちで、神との関係を持つに至った、と考える。そのようにして、神の側に決定権を委ねることで、王爺という神を受け入れる必然性を獲得する、と論じる。終章では、これまでの議論をまとめ、今後の課題として、王爺信仰に新たに加わる信者たちの研究や、いや増しに盛んになりつつある、台湾における同様の廟に関わる信仰現象との比較などを今後の課題として論を閉じる。

審査において、本論文の長期にわたる文化人類学的な調査の綿密さ、今日多くの信者を集めつつある新たな宗教現象の複雑さに正面から立ち向かった姿勢、現在の現象に目を奪われるだけでなく歴史的な観点から分析を試みたこと、そして、霊魂観の変化、信仰における個人の出現など、進行しつつある変化の過程をこれまでの文化人類学的な研究をふまえて行った解釈の斬新さなどは高く評価された。一方、批判点として、文化人類学の仕事としては、たとえば日本などを含めた東アジアとの比較などがなされず、あまりに中国の地域研究の内側にとどまっている感があること、また、長い期間をかけて完成させた仕事ゆえか、たとえばこれまでの中国研究において長年の問題であった霊魂観などの理論に対し新たな一石を投じようとしているのか、またはそうした霊魂観の変化を背景として、産業社会の中に衰えることなくかえって盛んになっている民間信仰の現在における理由を明らかにしたいのか、立論の焦点が揺らぐことがしばしばあること、などが指摘された。しかし、論者自身もそうした問題を今後の課題として自覚しており、何よりも本論文がそうしたこれからのさらなる展開の堅固な基礎となることは言うまでもない。

以上により、本論文提出者は文化人類学の研究に対して重要な貢献をなしたと評価される。従って、審査員一同は、本論文提出者は博士（学術）の学位を授与されるに十分な資格があるものと認める。